第 239 回　東京都港区の香取茂世像と江東区の北原怜子像

筆者：林　久治（記載：2023 年 6 月 18 日）

（１）前書き

私（筆者の林）は Random Walks （乱歩）という題名で偏屈老人（林久治）の気侭な紀行文のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団（１）のサイト/）の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいるので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要不可欠である。昨年の７月は、第７波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の３人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は９月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってからも、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、２）のサイト/f から閲覧出来ます。

私は 3 月 21 日から 31 日まで、大阪に滞在し孫達の世話をした。その間に、銅像探索も少しは出来た。227 回の記事/f では、その中から大阪市の弘世像の探索記を記載した。228 回の記事/f では、茨木市の奥田光像の探索記を記載した。229 回の記事/f では、京都市の田辺朔郎像の探索記を記載した。230 回の記事/f では、大阪市中央区の林市蔵像の探索記を記載した。

私は 5 月 27 日と 6 月 4 日に新木場駅前にある木材・合板博物で浅野吉次郎像と吉田猛・チサト夫妻之像を探索し、これらの探索記を前回の記事/f に記載した。なお、前々回の記事/f で私は江東区富岡八幡宮の富岡宮司像を紹介した。戦後、富岡氏は神社庁の創設に貢献したが、私は神社庁に銅像があるかどうかを検索した。その結果、神社本庁には銅像は無いが、東京都神社庁には香取茂世像があることを発見した（３）のサイト/）。

本像は１）のサイト/に収録されていないので、私は 6 月 16 日に本像を探索した。そのついでに、京葉線塩見駅前にある北原怜子像も探索した。本像は大変有名で１）のサイト/には勿論収録されている。しかし、本像の基本情報が全く記載されていなかったので、探索した次第である。本稿は上記２像の探索記である。なお、本稿では私の意見などを青文字で、資料の内容などを緑文字で記載する。

（２）東京都神社庁の香取茂世像

次ページの図１上に、東京都神社庁（東京都港区元赤坂 2-2-3）の周辺地図を示す。本庁は JR 信濃町駅から徒歩約 10 分である。（本文は３ページに続く。）

図１．上：東京都神社庁の周辺地図、下：東京都神社庁の玄関前に設置された香取茂世像

図１下に、東京都神社庁の玄関前に設置された香取茂世像を示す。本像は玄関の外側にあるので一般の閲覧が可能であり、屋根下に設置されているので風化防止となっている。図２左に、香取茂世像の全景を示す。台座正面には題字と碑文があった。題字には「香取茂世先生壽像」とあった。銘文は次ページの図３左に示す。

図２．左：香取茂世像の全景、右：香取茂世胸像。

胸像の写真を図２右に示す。本像の側面には制作者の氏名が彫られていた。その写真を次ページの図３右に示す。それには「昭和三十五年五月　堀進二作」とあった。３）のサイト/には、本像の設置経緯、除幕式の日付、香取氏の略歴（逝去年を含む）等が記載されている。以上の資料などにより、香取像の概要は次の通りである。

香取茂世先生寿像

設置場所：東京都港区元赤坂 2-2-3　東京都神社庁玄関前

制作者：堀進二

除幕式：1960 年 10 月 7 日　喜寿を祝賀

設置経緯：江東区・香取神社の宮司であった香取茂世氏（1884－1962）は、1946 年、東京都神社庁初代の庁長に就任。終戦直後の混乱期に、管内罹災神社の復興のために、安い木

材の斡旋や煩雑な事務手続きに便宜をはかるなど懸命に力を尽くされた。また、現在の直階講習会につながる神職家族講習会を始めるなど、広く人材の育成に努め、東京都神社界の礎を築かれた。

台座正面の碑文

先生は明治十七年十月三十日亀戸香取神宮の杜家に生る　資性温厚にして慈父の如し明治四十一年家職を繼ぎ拮据經營すること五十有餘年此間地元神職會長を初めとして東京府神職會副會長大日本神祇會副支部長神祇本廳理事監事等の要職に就き戰後神社廳の設立を見るや初代廳長となり爾来萬難を排して諸制度を定めｘｘを確立して人の和を圖り戰災神社の復興に心を碎き神社廳今日の基礎を築かれたる功勞は眞に顯著なりと言ふべし先生の喜壽を迎へらるるに當り茲に管内神職並びに有志相謀りて壽像を建設して其の功績を永く世に傳えんとす

昭和三十五年十月三十日　香取先生喜壽祝賀會

図３．左：台座正面の碑文、右：本像側面のサイン

（３）カトリック潮見教会の北原怜子像

私は東京都神社庁の香取茂世先生寿像を探索した後、JR 信濃町駅から JR 東京駅にまわり、京葉線に乗り潮見駅で降りた。潮見駅の周辺地図を図４上に示す。駅から徒歩約 10 分でカトリック潮見教会（江東区潮見 2-10-5）に到着した。

図４．
上：潮見駅の周辺地図、
下：カトリック潮見教会の入口。

図４下に、カトリック潮見教会の入口を示す。扉は少し開いていて、扉の傍（「カトリック潮見教会」の標識の裏側）に１基の少し小さめの立像があった。立像の周辺写真を図６に示す。本像の横には、石碑があった。本像の台座正面には銘盤があった。

図５．北原怜子像の周辺

次ページの図６上左には北原怜子立像を、図６上右には石碑に書かれた「碑誌」を、図６下には本像台座正面の銘文を示す。台座正面の銘文には次のように書かれていた。

われは主のつかいめなり、仰せの如くわれになれかし　エリザベト玲子

４）のサイト/1によれば、上文は**「お告げの祈りにもなっている受胎告知の際の聖母マリアのことば(ルカ１・38)」**である。北原さんが**「蟻の町のマリア」**と呼ばれていたことは有名であるが、私は彼女の具体的業績を知らなかった。そこで、私は今回の銅像探索を機会に、彼女の人生を勉強した次第である。

（本文は８ページに続く。）

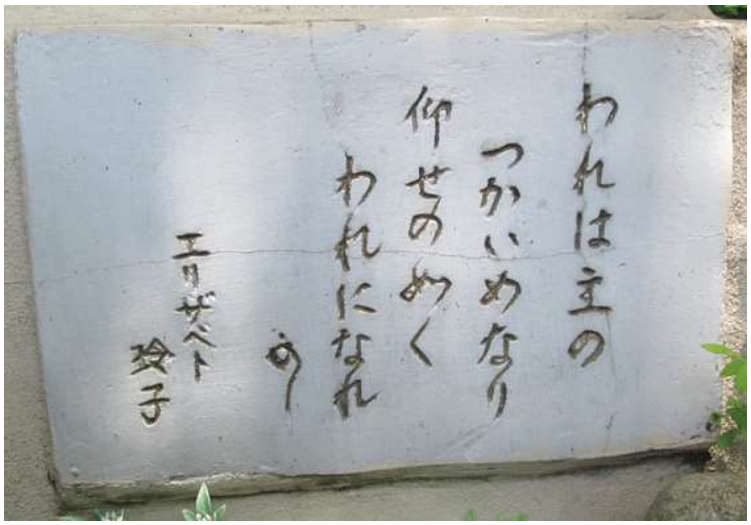

図６．
上左：北原怜子立像、
上右：碑誌、
下：本像台座正面の銘文。

「蟻の町」や「蟻の町のマリア」は終戦直後の 1950 年代の話であるが、現在でもそれらの記事は多い。その主なものを、以下に列挙する。

①ウィキペディア（蟻の町）：蟻の街とは、1950 年 1 月頃、現在の隅田公園（東京都墨田区）の一角で、言問橋のそばにあった廃品仕切場および「蟻の会」という労働者の生活協同体があった一帯を指す。マスコミ報道によって付けられた呼び名である。「蟻の街」があった一角の初期は、同胞援護会が管理していた製材工場跡と約 600 坪の土地を元ヤクザの小澤求が同会より借り受け、廃品の仕切り場とするためだった。仕事のない人々を日雇いで雇いあげ、ガラスくず、鉄・銅くず、縄くず、紙くず等を拾い集めて回収させ、再生工場へ送る事業を行った。当時はこのような業務を行う労働者を「バタヤ」と呼んだ。小澤は自分の仕切る一角で起こるトラブルについて法的手段で解決しようと考え、同胞援護会が関係する法律事務所でアルバイトをしながら著作や脚本などを手掛けていた松居桃楼を相談役に迎えた。蟻の町の課題として、東京都から土地の強制立ち退きをされるリスクがあった。そのため、松居は孤児救済者として知られた修道士であるゼノ・ゼブロフスキーと蟻の町の奉仕に尽力していた北原怜子に協力を依頼し、クリスマスの開催と翌年の聖堂建築を行った。松居は東京都との交渉を有利に進めるため、北原を「蟻の町のマリア」としてマスコミに宣伝し、彼女の著書「アリの町のこどもたち」を利用した。1958 年 1 月 20 日に、東京都は蟻の会の要求を全面的に飲んで、江東区深川 8 号埋立地（現在地）へ移転が決定した。なお、3 日後の 1 月 23 日に北原が死去した。

②ウィキペディア：北原 怜子（きたはら・さとこ、1929 年 8 月 22 日 － 1958 年 1 月 23 日）は、キリスト教の教義に基づき献身的な活動を展開した社会奉仕家である。「蟻の町のマリア」とよばれた。東京都出身。松居桃楼（まつい・とうる、1910 年 3 月 30 日 － 1994 年 9 月 25 日）は、日本の随筆家。本名・桃太楼。早稲田大学政経学部卒。松竹演芸演劇審議会委員を務め、のち 1942 年に台湾演劇文芸部長。1946 年に帰国、1950 年に台東区隅田公園バタヤ地区蟻の街結成に参加しその住人となり、北原怜子とともに蟻の街の中心となる。1958 年に松居の著作「蟻の街のマリア」は五所平之助監督で映画化された。

③歴史が眠る多磨霊園（５）のサイト/1）：北原怜子の略歴、父（北原金司）の略歴、ゼノ・ゼブロフスキー （Zeno, Zebrowski 1891-1982. 4. 24）の略歴。

④蟻の街のマリアと呼ばれた北原怜子の慢心と回心（６）のサイト/2）：大学教授を父に持ち裕福な家庭で育った北原怜子（1929－58）は修道士ゼノ・ゼブロフスキー（1898－1982）と出会い、蟻の街の存在を知る。カトリックの洗礼を受け、修道女になることを望みながら、慈善活動にも勤しんでいた敬虔な少女は「蟻の街」で奉仕を始めることを決意した。そんな怜子の慈善活動を、街の世話人として活動していた文筆家・松居桃楼（1910～94）は偽善だと指弾した。自分たちは普段温かい家で美味しいものを食べ、たまに子供たちに美味しいごちそうを振る舞う。そんなものは自己満足に過ぎないと。子供たちはまた貧しい日常に帰っていくのだ。あの日食べた美味しいごちそうを思い出しながら。松居は怜子に言う。「『助けてやる』という気持のときには、助ける人が上で、助けられる人が下なのです。つまり＜助けられる人＞を見くびっているのです。だが、ほんとうの同情というのはそんなものじゃない。上も下も関係なしに、肩を並べて、一緒に悩み、一緒に苦しむことなんです」（松居桃楼「アリの街のマリア 北原怜子」）

⑤「蟻の街のマリア」と呼ばれた社会奉仕家（7）のサイト/1）：ゼノさんと北原怜子さんとの写真資料を掲載。

⑥本「アリの町のマリア」（８）のサイト）：「愛の使者　北原怜子」を分かり易く紹介している。現在、購入可能。図書館でも閲覧可能と思われる。

⑦映画「蟻の町のマリア」（９）のサイト）：製作年：1958 年、配給：松竹。戦争で焼け出された人々が肩を寄せ合って生きてきた浅草バタヤ部落の生活改善のため、命を懸けて戦った北原怜子(さとこ)さんの短い人生を描いた作品。東宝争議で労組のリーダーとなり

レッドパージされた五所平之助監督の監督作品。文部省特薦映画で、60 歳以上の人は学校で見せられた人もいるはず、必ず泣けること請け合い。主演は千乃赫子（ちのかくこ）、朝丘雪路と同期の宝塚娘役出身でこれが映画デビュー作だった。共演は南原伸二（宏治）、丸山明宏(美輪明宏)、佐野周二、岩崎加根子、水原真知子など。

⑧動画：1_蟻の街の誕生 - YouTube、2_蟻の街へ - YouTube、3_お嬢さんがバタ籠担いで（https://www.youtube.com/watch?v=z9_rJOlzYKg）

図７．左：本「アリの町のマリア」の表紙、右：映画「蟻の町のマリア」のポスター。

以上の資料などにより、北原像の概要は次の通りである。

北原怜子立像

設置場所：東京都江東区潮見 2-10-5　カトリック潮見教会正門横

制作者：不明、設置時期：不明

設置経緯：北原怜子（きたはら・さとこ、1929. 8. 22－1958. 1. 23）は昭和期の社会奉仕家で、「蟻の町のマリア」と呼ばれた。東京出身。群馬大学や東京農業大学の教授を務めた経済学博士の北原金司の三女として生まれる。 桜蔭高等女学校を経て、昭和女子薬学専門学校を卒業し、1949 年光塩女子学院にて受洗。カトリック信者。洗礼名はエリザベト、堅信名はマリア。令嬢として生まれ育ったが、浅草の姉の家に住んでいた時の 1950 年にゼノ神父と出会い、蟻の町での奉仕を始める。 「蟻の町」は墨田公園の一角にあり、40 世帯、百余名のバタ屋共同生活体として発足したもので、私欲を排し、共同購入、共同利用の方針をとっていた。 怜子は次第に持てる者が持たない者を助けるという姿勢に疑問を抱くよ

うになり、自ら「バタ屋」となって廃品回収を行いながら、町の子供たちの教育にあたった。 その姿は称賛され「蟻の町のマリア」と言われ親しまれた。『蟻の町の子供達』という著書も刊行した。体力の無理が祟り結核を患い、蟻の町にて 28 歳で帰天。怜子が亡くなった年に松竹は、ノンフィクションに近い形で「蟻の町のマリア」を映画化した。

怜子が過労で結核になり早世したのは、「彼女を利用した『蟻の町』幹部の松居氏と、彼女を『蟻の町』に紹介したゼノ神父の責任が重大である」と私（筆者の林）には思える。

参考資料

１）のサイト：https://douzou.guidebook.jp/

２）のサイト：http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf

３）のサイト：http://www.tokyo-jinjacho.or.jp/goshahou/syodaityoutyou_kyouzou/

４）のサイト：http://sakaba.cocolog-nifty.com/cocoro/2007/03/post_0cbd.html

５）のサイト：http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/K/kitahara_s.html

６）のサイト：https://www.sougiya.biz/kiji_detail.php?cid=1452

７）のサイト：https://www.suginamigaku.org/2019/08/kitahara-satoko.html

８）のサイト：本「アリの町のマリア」、著者：やなぎや・けいこ、発行所：ドン・ボスコ社、発行：2002 年 5 月 24 日、定価：750 円。

９）のサイト：蟻の街のマリア 1958 歌舞伎座映画制作 松竹配給 感動実話 – 永遠のセルマ・リッター (cinekobe.com)